柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
第 86号

天保の飢饉　王禅寺村はその時どうした(４)

＊＊志村家文書が語る江戸時代後期の村の姿と人々の動き＊＊

=====名主志村弥五右衛門が役所より表彰状を受ける======

江戸時代後期天保年間(1830～1844)は人々にとって苦労の時代でした。王禅寺村の人々も同様、特に村を取り仕切っていた名主のご苦労は大変なものであったようです。

今回のシリーズでも何回か書きましたように、この時代、たびたび発生した飢饉に伴う米穀の買い占めと米価の高騰。やがてこれらが引き金となり、人々の生活が脅かされ、全国各地で百姓一揆や打ち壊しが頻発し、社会の不安がかき立てられました。封建社会の土台が揺るぎ始めますと幕府や各藩での取締は一層厳しくなりました。関東地域では関東取締代官やその指揮の元に「関東取締出役=八州廻(はっしゅうまわり)」等が目を厳しく光らせるようになりました。

このような時代の中で各村の名主は「役人」と「村人」の狭間に立ってずいぶん苦労したことだと思います。

王禅寺志村家文書には、当時、名主の志村氏より村人への穀物やお金等の支援が行われていたことを示す多くの書き付けが残されています。

天保 7 年 11 月の「凶作に付き助精差出帳」からは、名主志村弥五右衛門が困窮していた村人に対し金品の支援を盛んに行っていたことが分かります。例えば「王禅寺村本村 3 名に大豆計 3 俵、1 名に大麦 2 俵と銭 2 貫五百文、1 名に銭 2 貫五百文。真福寺谷 2 名に大豆計 2 俵。上鉄村 4 名に大豆計 4 俵、早野村 1 名に大豆 1 俵」と記載されています。何と近隣の村人にも支援が行われています。

また、同年 12 月 15 日には王禅寺村住人 9 名に粟計 4 俵、大麦計 5 俵が助精されています。さらに同日に、穀物だけではなく現金についても王禅寺村本村住人 6 名にそれぞれ「金百疋(1 両の 1/4=現在の約 2 万 5 千円)」を、真福寺谷の 7 名にもそれぞれ「金百疋」、早野村・上鉄村各 1 名、にも助精しています（※助精＝じょせい=一般的に金品の貸付であるが当時の詳しい事情は不明）。

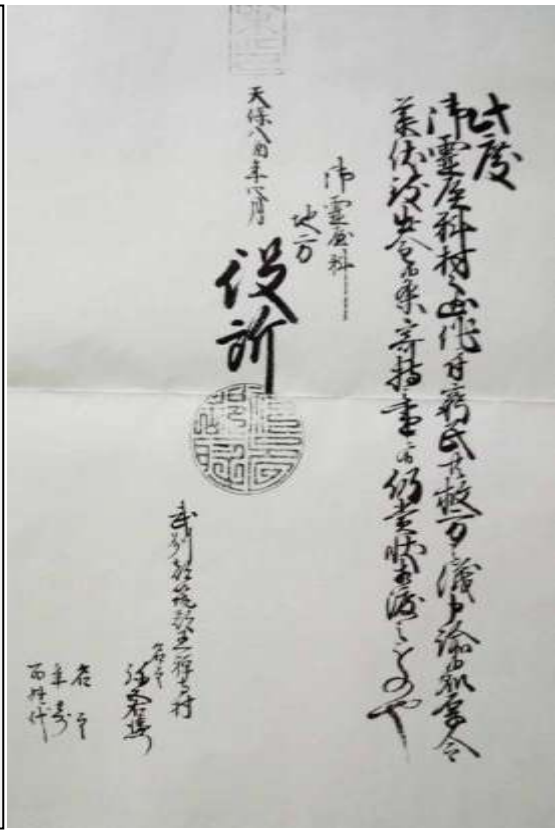
ご紹介した上記の志村氏の支援は、ほんの一部分ですが実際には、王禅寺村のみに限らず周辺の村々に対しても支援が行われていました。このような状況の中で、名主志村弥五右衛門は、翌天保 8 年 4 月に「凶作による窮民救済をするように(役所が)依頼したところ、よく理解して、出金することを承諾した。この行いは稀にみるほど優れた心がけによるもので賞状を渡すものである」という内容の感謝状を役所から授与されています（右資料参照）。

この資料にある「御霊屋料=おたまやりょう・みたまやりょう」とは徳川氏代々将軍の霊が祀られている江戸の増上寺の運営費用をまかなうための年貢を受け持つ地域で、川崎市内では王禅寺・塚越・鹿島田・下平間・市ノ坪・小倉・小杉・宿河原などの村々の一部がそれに当てられていました。尚、王禅寺では、2 代将軍秀忠の奥方「江(ごう)」の方のお化粧料になった場所で現在の王禅寺東 5 丁目の「化粧面谷戸」付近です。

参考資料:「志村家文書」
文:板倉

※志村家文書の解読につきましては当柿生郷土史料館の飛田三枝子専門員の協力をいただきました。大変ありがとうございました。

この度
御霊屋料村々凶作につき窮民ども救い方の儀申し諭し候ところ、厚く承伏せしめ出金致し候条寄特のことに候。よって賞状相渡すもの也。
（奇特）
（これ相渡すもの）
御霊屋料
地方
役所　印
天保八酉年四月
武州都筑郡王禅寺村
名主
弥五右衛門
名主
年寄
百姓代



志村弥五右衛門への感謝状　原資料（右）と読み下し文

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第56話

麻生の寺院(６) 林清寺・大林寺(長津田)

小島　一也 (遺 稿)

林清寺本堂

柿生霊園で知られる栗木の林清寺は、江戸時代栗木村の領主岡野家の菩提寺ですが、そこには古い由来があるようです。この林清寺について新編武蔵風土記稿は、「除地、村の西北の方にあり、禅宗曹洞派、長津田村大林寺末、盛谷山と号す、開山春朔寛文四年寂す、客殿六間半に五間南向きなり、本尊釈迦座像にして長五寸ばかりなるを安す、定朝の作なりと云」と記して開基(創立者)については触れておりません。

この栗木の林清寺の前の、川(注)を隔てた丘には、その昔、真言宗の寺が在った、との伝承があります。今でもその地域には「法印(ほういん)様」と呼ぶ石塔がその名残をとどめています(注)が、当時(室町末期)この地に真言宗の寺が在って不思議はなく、前稿(第 51 話)黒川の金剛寺(廃寺)、古沢の福正寺(廃寺)、万福寺の医王寺(廃寺)などと、一連の寺だったのでしょう。

この寺と林清寺の沿革について、「青谷山林清寺落成記念誌(本殿落成記念平成 13 年刊)」には、「天正十八年(1590)、小田原の北条氏政の家臣岡野平兵衛房恒が栗木村を領した時、真言宗の寺を再建し、林清寺と号し、山林・田畑若干を寄付した。その後、寺門荒廃の時至り、岡野盛谷なる者、承応三年(1654)再営を志し、春朔和尚を招請し、曹洞宗に改め開山とし、山号を青谷山と号した。」と記されておりますので、この林清寺は元、真言宗の寺で、開基は岡野房恒、開山は分かりませんが、創建は天正年代(1573～90)と思われます。その後 60 余年を経て、現在の林清寺は岡野盛谷(房恒の孫)により、長津田大林寺五世春朔上人を開山に、承応三年(明暦二年 1656 の説もある)、曹洞宗の寺に改められて、現在地に創建したことになります。

江戸時代、栗木村を領した岡野家は、伊豆田方郡狩野庄を領有していた後北条家の家臣で、房恒の父を板部岡江雪融哉(みちなり)と謂い、長津田村に居を構えていました。房恒は天正十八年秀吉の小田原攻めの際、埼玉の岩槻城に籠り戦傷した豪勇の武将で、破れて妻の実家の里、恩田村に潜んだと云われ、のち、赦されて岡野氏を名乗り、徳川旗本に取り立てられ、長津田村に 500 石の知行を得ました。寛永十年(1633)には、都筑郡栗木村(50 石)、下総国香取郡、駿河国富士郡下に、合計 1500 石を知行しています。本拠を長津田村に置き、都筑の曹洞宗の名刹大林寺を創設していますが、その創始は天正年間で、江雪入道融哉が長津田山の古寺を再興し、愛甲郡(現厚木市)の曹洞宗清源院の五世英顔麟哲(りんてつ)大和尚を開山としたものと言われ、慈雲山大林寺と号し、本堂 10 間に 8 間半、本尊は釈迦如来像で、慶安二年(1649)、大猷院(家光)より寺領 15 石の朱印を賜り、岡野家第三代成明の頃には、恩田の福正寺、長津田の髄流院・龍昌院、十日市場の常帋寺、西八朔の宗泉寺、中山の大蔵寺、川井の円法寺・福泉寺と、恩田川流域に多くの末寺を持つに至っています。

大林寺本堂

なおこの大林寺の開基岡野氏について、新編武蔵風土記稿は、長津田村「福泉寺」の欄に「古義真言宗、恩田村徳恩寺末なり、薬王山医王院と称す、地頭岡野房恒が開基にして、鎮守の別当寺とせり」と記していますので、この岡野房恒は神仏への信仰が篤く、長津田でも真言宗の寺を再建しているのがわかります。恩田の「徳恩寺」は、麻生の王禅寺中興の祖等海上人の寺で、前稿(51 話)万福寺の医王寺(廃寺)と考え合わせ、栗木にあった真言宗の寺(古林清寺)は、王禅寺に連なる寺であったことを物語っています。

この栗木村領主岡野房恒は長寿を得て万治元年(1658)没したと言われています。従って承応三年(1654)大林寺の末寺として、岡野盛谷により曹洞宗青谷山林清寺となったのは、房恒の菩提を弔うものであり、その後、寺運は開けますが、この栗木村は一村二寺(常念寺・林清寺)石高 81 石余、戸数 26 軒(元禄十五年郷村帳)で、幕府が倒れ、岡野家が没落すると、檀家わずか 16 戸、寺門の荒廃甚だしく、これを救ったのが、往時房恒が寄進していた山林で、現在、宗教法人柿生霊園として林清寺の支えになっています。

岡野家墓所

一方、長津田の大林寺は、町中央(御前田)の広い寺域に七堂伽藍を持ち、鬱蒼たる樹木に覆われた岡野家累代の墓地には、2m 余の五輪塔が石灯籠とともに建ち並んでいます。

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「栗木 明日へ語り継ぐ」「歴史の舞台を歩く緑区」「歩け歩こう麻生の里」

編集者注：現在、川は暗渠になって消滅し、法印様は個人宅の敷地内に移されています。

シリーズ
時間と時計の話１

和時計と西洋時計（１）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆はじめに◆

私たちは、日々「今何時」とか「もうこんな時間」などと、時計の刻む時間を気にしながら生活しています。なんとなく、毎日の時間にせかされて生活していると感じていらっしゃる方も、多いのではないでしょうか。しかし、太古の昔から、人類は時間に追われる生活をしていたわけではありません。人類の生活が時間で管理されるようになったのはいつからかというと、それはイギリスではじまった産業革命によって、工場制度が誕生し、普及する過程で、労働者を工場で一定時間働かせるために、時計の刻む時間が必要とされるようになった時からでした。

ロンドン　ウエストミンスター宮殿の時計塔

それ以前、近代以前の世界では、正確な時間など、庶民には全く関係のないものでした。日の出と共に仕事をはじめ、日暮れと共に仕事を終える生活は、農民はもちろん手工業者や商人にとっても、今が何時か分からなくても、なんら不都合のない日々の生活だったのです。こうした時代に、正確な時間を必要としたのは、教会や寺社の聖職者や僧侶たちだけでした。大切な祈りの時間を間違えてはならなかったからです。

当初は、宗教界で生活する宗教者たちにとってのみ必要であった「正確な時間」が、どのような経路を経て、俗界の人々に必要とされるようになり、さらには庶民の世界にまで取り入れられるようになったのか。今回から１年程度をかけて記していきたいと思います。どうぞ気楽にお付き合いください。

◆教会の時間と商人の時間◆

農村の生産力が上がり、余剰生産物の交換が可能になってくると、各地で商人の往来が次第に活発になってきます。そうなると、通行税を取り立てるための関所が出来、やがて都市的な空間が誕生するようになります。こうなると、関所には夜間の通行を禁止する分厚い門が出来ます。都市でも夜間の安全を保つために、城壁と市門が誕生します。そこでは、いつ門を開き、いつ門を閉じるか。開門と閉門の時間が大切になってきます。

プラハの時計塔

西欧世界を旅してみると、時計塔が都市や地域のシンボルとして、大切にされているのを、良く見かけます。その塔は、教会の時計塔であったり、市役所の時計塔であったりするのですが。西洋では 13 世紀頃からでしょうか。領主や国王から自治権を買い取った自治都市の商人たちが、教会の時間とは別種の商人の時間を持つようになってきます。それは、教会の禁じるお金の貸し借りにかかわる利子の観念が発達したことに依ります。

お金は商売に投下されることにより、時間と共に回転して利益を生みだす性質を持っています。それゆえ、お金を借りて使用しても利益を生みます。ですから借主は、お金を貸してくれた貸主に対し、利益の一部を「あなたがお金を貸してくれたおかげで、利益を得ることが出来たから」と、謝礼として元金にプラスして返済することが当然とされたのです。こうした観念の一般化が、商人たちに、お金は時間と共に利を生むもの、時間は利子を計算する上での重要な要素なのだという、観念を植え付けました。こうして、教会の時間と異なる商人の時間が誕生し、教会と並んで市庁舎にも時計塔が聳えるようになったのです。

◆時間の観念◆

ところで、人間が日中だけ行動する時代では、正確無比な時を知る必要はありませんでした。祈りの時間を知るのであれば、おおよその時間が分かれば十分でした。それでもおおよその時間は知る必要がありました。さらに残念なことなのですが、古来人間は、何度も何度も飽きることなく戦争を繰り返してきました。それゆえ戦場では、四方に散った味方が、一斉に敵陣に向けて攻勢に出る必要がありました。そのためには、味方が時間を共有することが欠かせません。ここに教会や寺院の鐘の音を合図として利用する習慣が生まれたのです。

では、教会や寺院の鐘は、何を利用して時刻を計っていたのでしょうか。彼らは、初期的な時計を用いて時間を計っていたのです。それが水時計や火時計、砂時計だったのです。こうした原初的な時計群の中で、最も正確性が高く、しかも長時間の使用が可能だとして、特に宗教界に好まれ、愛用されたのが香（火）時計でした。蝋燭も非常に貴重な時代だったのですが、蝋燭に火を灯して確かめると、香時計の正確さが確認できます。

こうして機械時計の登場前から、時間の計測は比較的正確になされていたのです。あまり知られていないのですが、船乗りたちもまた、時計で測った時を必要としていました。船では砂時計を使っていたようなのですが、船の位置を知るために、船乗りたちは常に「どこそこ（Ａ）」から１時間とか、「どこどこ（Ｂ）」から 2 時間というような記録を残して、船の現在位置を確認していたのです。詳しくはいずれ述べますが、こういう方法で船乗りたちは、危険海域への乗り入れや、浅瀬に乗り上げることによる座礁の危険から、船とわが身を守ろうとしていたのです。　（続）

参考文献
角山　栄『時計の社会史』、　ジャック・ル・ゴフ「教会の時間と商人の時間」（『思想』1979 年 9 月号所収）

柿生郷土史料館設立功労者　板倉敏郎氏が帰郷！！

平成 22 年 12 月にオープンした柿生郷土史料館設立・発展の最大の功労者、板倉敏郎氏が一身上の都合により故郷の新潟に帰郷されました。深い知識・広い人脈、そしてなによりも熱い情熱を持って活動されてきましたが、残念ながら引退という局面を迎えてしまいました。今までのご尽力に感謝したいと思います。

引退されたとはいえ、今後も当紙面への寄稿をお願いしていますし、指導いただかなくてはならない場面が多々あります。今後の運営の中心は支援委員会となりますが、後ろ盾として支えていただきながら、さらに発展させるべく頑張っていきますので、地域の方々におかれましては今後とも変わらぬご支援のほど、よろしくお願いいたします。

柿生郷土史料館７･８ 月催物ご案内　（入場無料）

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日　（原則として月４回）

7月　5･12･19･26 日（毎日曜日）　**8月**　1･8･22･29 日（毎土曜日）

◎開館時間：午前１０時～午後３時　（8月 15 日は休館です）

第８回　特別企画展　新聞で見る近代日本の歩み展（２）
◆◆明治・大正・昭和の歩みと人々の生活◆◆

会場：柿生郷土史料館特別展示室

(第２期) ◎明治の政治と対外関係　　期間：５月２４日(日)～８月２９日(土)

ミュージアム・トーク　7月 19 日（日）　午後１時 30 分より特別展示室にて

テーマ：「日清・日露戦争と新聞」　展示解説です。どうぞお気軽にご参加ください。

第９回実物の歴史 ミニ歴史資料展　王禅寺村「志村家文書」展示公開（１）
◆◆天保の飢饉に関する文書をみる◆◆

期日：４月１８日～９月２０日

内容：王禅寺村「志村家文書」をもとに江戸時代後期の社会の姿と王禅寺村の様子について考えてみます。

第 55 回　カルチャーセミナー　鶴見川流域文化探訪シリーズ（６）入門　鶴見川流域史（中世編その１）

●鶴見川流域史を古代・中世・近世で考える　その第３弾！いよいよ中世編

講師　中西望介氏　（戦国史研究会会員）

日時　平成２７年７月２６日（日）午後１時３０分～

内容　中世前期における鶴見川流域諸勢力の変遷を追う

緊急募集

サマースクール　縄文土器を作ろう～縄文人の製作を体験する

日時　平成２７年８月１日（土）午後１時３０分より、柿生中学校 金工・木工室にて

指導　王禅寺在住の陶芸家 内野勝雄先生　土器の成型から縄目文様入れまでを実作業

対象　小学３年生から中学生、および保護者 60 名　親子での共同体験はいかがですか

費用　１名につき 500 円（実費）

申込　7 月 20 日までに、氏名・学校名・学年・連絡先電話番号・保護者名を記して FAX にて FAX 番号：044-989-0757（小林宛）

お問い合わせは 080-5513-5154 または 044-989-0622 小林までお願いします。

ついに完成！　「身近にあった信仰の世界と人々の思い」
ふるさと柿生の記憶を DVD 化 第１弾

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆